

常識を見直すと、仕事のグレードが変わる

(株)アルティスタ人材開発研究所代表

玄間 千映子

ポヤツとした課題よりハッキリした課題の方が、考える力は鍛えられると言いますが、それにはまず課題を認識する力を鍛えなくてはなりません。

『「考える力」の鍛え方』の著者上田正仁東京大学大学院教授によると、力強い課題を認識できるようになるには、その前に「好奇心」の働きが大きな役割をすると言っています。

なぜ、「好奇心」が「考える力」のキーワードになるかということ、人間には過去に学習した経験則で物事を眺めるというクセがあります。そのクセが、ポヤツとしていてもある程度の答えまで導いてくれるので、考える力が鍛えられなくなるのです。これは自分の経験を駆使している意味では非常によいことではあるのですが、別の観点から眺めると、成長に乏しい活動になっています。自分にとっての要領で仕上げてしまおうとする、経験が引き起こすこうした現象を打破することに、好奇心というスパイスが有効なのですね。

ところがやっかいなのは、好奇心というのは個人の関心から生まれてくるものだということ。そのため必ずしも、業務課題とは繋がらなくなってしまうことが生じます。それを防ぐには、好奇心を働かせる対象を世間一般から拾ってくることです。なぜなら、会社の事業継続にとって世間は二人三脚すべき相手だからです。ですから、世間から好奇心の対象を拾ってくることは、回り回って自分の仕事にとってそれほどの外れにはならないのです。

とはいえ、業務に関わることから「好奇心」の糸口は、やはり掘みにくいようです。それになれるた



め、常識を確かめるという切り口で、業務に関わるところから拾ってみましょう。

業務効率は、「量」として求められてきますが、それには必ず「単位」がつきものです。そこで、「単位」に好奇心を向けてみます。「単位」にはcmやgもあれば、個数や通貨のようなものもあります。前者は基準器による「物理的」、後者は世の中の「信用」を根拠にしています。

それぞれの単位から、ものごとを眺めてみましょう。ここに100gの肉の塊が2つある、とします。この2つは物理的単位で見れば、同じです。けれど、中身で見れば違ってきます。さて、同じものとするか、違うものと扱うか？ ここでは「同じ」にすることを考えてみます。それには、「信用」は結果の受け手の感情によって支えられている、という見方に着目することが大事です。受け手が満足すれば、違っているものでも同じになるのです。

物理的単位とは、物事を考える時の便宜上のものにしかすぎません。世の中は「受け手との空間」です。「信用」単位で眺めると、業務結果は受け手にとってどうか、という見方を活性化させてきます。常識を疑ったり否定するのではなく、「見直す」という“好奇心スパイス”で「考える力」を鍛えると、経験依存では気づかなかった業務の改善点も見やすくなり、結果のグレードも変わってくるのです。

筆者紹介

玄間千映子（げんま・ちえこ）



(株)アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大学卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。

財団法人日本船舶振興会（現日本財団）役員、国会議員各秘書を経て1994年に前身の(株)アルティスタを設立し代表に。2006年現社名に改組。日本大学大学院非常勤講師、(株)港湾空間高度化環境研究センター監事などを兼任。著書に「ジョブ・ディスクリプション一問一答」「リストラ無用の会社革命」など。